

神奈川県
from **KANAGAWA**

横浜遠足で 自分のルーツを知ろう

日本国内でも、多くの外国人が居住する神奈川県横浜市。海沿いの鶴見区にある横浜市立潮田中学校では、自分たちの「ルーツ」を探り、「違い」を尊重し合える心をはぐくむべく、多文化共生教育に取り組んでいる。



2009年に開港150周年を迎えた横浜。海はこの街のシンボルだ

外国とつながりのある仲間たち

「これが南米に渡った人の名簿なんだね！」
「船に乗って行ったなんてすごいなあ。今なら飛行機ですぐに行けちゃうのに」
5月下旬、真っ青な空に鮮やかな新緑が映えるこの季節。横浜の赤レンガ倉庫にほど近いJICA横浜に併設する海外移住資料館に、横浜市立潮田中学校の2年生が入れ替わり立ち替わり訪れる。

入り口には、彼らの到着を待つ先生たちの姿。「はい、行ってらっ

しゃい！」。激励を受けた生徒たちは、資料館のドアをくぐり、日本人の移住の歴史についての展示に見入っている。「へえ、知らなかったなあ。そんな声があちこちで聞こえる。」
これは、2002年から同校が実施している「横浜遠足」の一面だ。

京浜工業地帯に隣接し、外からの労働者が多い横浜市鶴見区。韓国、中国、フィリピン、中南米など、実にさまざまな「故郷」から居を移した人たちが共存している。

また、中南米には沖繩県から移住した人も多く、1990年の入国管理法改正で日系人の就労資格



館内では学んだことをノートに書き込み、事後学習に役立てる



JICA横浜内にある海外移住資料館の展示に見入る生徒たち。新しい発見の連続だった

が緩和されてからは鶴見区にも沖繩にゆかりのある日系人が増えている。

工場が立ち並ぶ臨海地区にある潮田中は、全校生徒600人のうち100人が外国とつながりのある生徒。それ故に、学校生活の中で、言葉や文化の違いからくる問題に直面している子も多かった。そこで、同校では1993年に市内でも先立って「国際教室」を設置。外国とつながりのある生徒や保護者に対して、日本語指導や生活相談、補習授業などを積極的に行ってきた。また、「違いを認め、尊重し合い」「差別をしない、させない、許さない」精神を育むべく、社会の授業や課外活動などを活用して、多文化共生教育に力を入れる。02年から7年間、潮田中に勤務していた加藤治先生（現横浜市立港中学校）は「私が赴任した時はすでに、子どもたちの間に『共生の心』が育っているように感じました」と話す。

地域と自分を発見するための街歩き

しかし加藤先生はある日、こんな場面に遭遇する。「潮田と外国のつながりについて話していた時に、あるフィリピン人の生徒が『カネのために来たんだよ』と言ったんです。どこか投げやりな感じで、このままではいけないと思

った」。移住者の「血と汗と涙」の歴史を、もっとしっかりと踏み込んで教えていかなければならない。そこで、加藤先生を含め、潮田中で多文化共生教育にかかわる教員たちが発案したのが「横浜遠足」だった。

横浜遠足の対象は2年生。毎年5月下旬、事前に横浜の開港や移住の歴史についてしっかりと学んだ上で、「知りたいこと」を見つけて、6〜7人の班に分かれて見学ルートを決めていく。

当日は朝9時に鶴見駅を出発。班ごとに、1日かけて横浜の街を探索する。目的は横浜の「今」と「昔」について知ること。バスや電車を乗り継ぎ、観光スポットとしておなじみの港の見える丘公園や赤レンガ倉庫、中華街、市庁舎など、さまざまな場所を回っていく。そして、チェックポイントとして必ず立ち寄るのが、海外移住資料館と横浜開港資料館。「スタッフの方に話を聞いたり展示を見たりして、自分たちの地域や仲間について学んでいきます」と潮田中の林弘幸先生は話す。

真のグローバル人材の育成のために

横浜遠足が始まって数年、日本人の子どもたちからこんな声がかげられるようになった。「外国とつながりのある友達がうらやま

しい。私には何のルーツもないから」。それまでは、「外国につながる生徒」への理解を主な目的にしていた横浜遠足。しかし、「日本人にも先祖から伝わる歴史がある。生徒全員が自分の存在について考え、誇りを持てるよう、横浜遠足も「ルーツ」をキーワードに変化していきました」と加藤先生は振り返る。事前学習として、同校に勤務する日系人教師の検見崎エリザ先生が自身の生い立ちについて講演をしたり、ブラジル移民と日本のつながりを描いたドラマを見たり……。遠足の後は、自分のルーツについて調べ発表し合ううちに、いつしか、自然と互いの「違い」を尊重し合う

子どもたちの姿があった。「地域柄、差別やいじめなどがあると思われがちですが、ここでは困っている仲間がいたら手を差し伸べるのは自然なことなんです」と林先生。「彼らがもったこの地域に誇りを持ち、多様な価値観を持って社会に出ていけるよう、サポートするのが私たちの役割だと思っています」。

相手の文化や立場を尊重し、自身の感性を磨いてほしい。先生たちのそんな思いで始まった横浜遠足。この地区で育った子どもたちは、地域に根差し、「世界を思いやること」ができる、真の意味のグローバル人材なのかもしれない。



横浜遠足のお昼は中華街で!



今年で創設100周年の赤レンガ倉庫は、レトロな雰囲気が人気。国際協力関係のイベント会場にもよく使用される